

令和7(2025)年1月

日本シェリー研究センター会員各位

日本シェリー研究センター 第33回大会のお知らせ

お正月の賑わいもいつの間にか過ぎ去り、振り袖をまとった新成人の姿が路上の風景に彩りを添える時期となりましたが、会員の皆様におかれましては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

前回の総会で承認されましたとおり、日本シェリー研究センター年次大会の開催時期変更にともない、この第33回大会からは原則3月上旬の開催が決まり、今年は3月8日(土)12:30より**帝京大学霞ヶ関キャンパス**にて開催される運びとなりました。

今回も充実した大会となっております。進境著しい若手研究者によるP.B.シェリーをテーマとした研究発表に現在のキーツ研究を牽引する実力派講師陣が織りなすシンポジウムが続き、これを笠原順路先生(明星大学名誉教授)による、バイロン卿没後二百周年を記念する特別講演が締めくくるといふ、イギリス・ロマン派詩人第二世代の詩世界を存分に堪能できるプログラム構成かと存じます。

また、以前よりご好評いただいている対面とオンラインのハイブリッド(ハイフレックス)方式での開催が今年も予定されております。当日はぜひ多くの会員の皆様にご参加いただき、例年以上ににぎやかな大会になりますことを期待しております。

末筆ながら、本年も会員の皆様にとって素晴らしい一年になりますようお祈り申し上げます。

日本シェリー研究センター会長

木谷 巖

オンライン (Zoom) 参加を希望される方へ

オンライン (Zoom) にて大会へ参加することを希望される方は、2025年2月10日(月)までに細川・黒瀬 両名宛にEメールにてお知らせください。(hosokawa@g.matsuyama-u.ac.jp / euk@adm.fukuoka-u.ac.jp)

その際、件名は「24年度大会参加希望」とし、会員の方はお名前を、会員でない方はお名前とご所属をお知らせください。

頂いたメールに返信の形で、Zoom ミーティング情報の詳細 (URL 並びにミーティング ID 番号、パスコード) を2月末日までに送付いたします。2月末日までに詳細がお手元に届かない場合には、申し訳ありませんが細川・黒瀬宛にお知らせください。

Zoom ミーティングに参加する方法については、以下をご参照ください。

<https://zoom-japan.net/manual/pc/join-zoom-meeting/>

事務局からのご案内

1. 出欠確認について

2月10日(月)までに、大会への出欠と出席方法(対面 or オンライン)および懇親会出欠を Google フォーム (<https://forms.gle/vt8pzLPcHBoZcN7D6>) にてお知らせください。

2. 会費について

大会会場では会費の支払いを受け付けておりません。8月にお送りした振込用紙をご利用いただくか、下記の振込先へお振込みください。よろしく願いいたします。

振込先：ゆうちょ銀行 00190-0-661999 日本シェリー研究センター

3. 会場費について

会場費は無料です。お気軽にご来場ください。

4. 懇親会について

会場：帝京大学霞ヶ関キャンパス (立食形式の予定)

会費：5,000円 学生会員は3,000円

帝京大学 霞ヶ関キャンパス ご案内

大会会場：帝京大学霞ヶ関キャンパス

〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-16-1 平河町森タワー9 階

土曜日はビルの玄関が施錠されております。

ドアの内側でアルバイト学生が待機しておりますので、ご入場の際は声をお掛けください。

●永田町駅下車

東京メトロ有楽町線、半蔵門線、南北線「永田町駅」より徒歩約1分（4番出口）

●赤坂見附駅下車

東京メトロ銀座線、丸ノ内線「赤坂見附駅」より徒歩約6分（7番出口）



日本シェリー研究センター第33回大会

日時: 2025年3月8日(土)

場所: 帝京大学 霞ヶ関キャンパス(平河町森タワービル 9階)

12:30 受付開始

1. 12:40 開会の辞 会長 木谷 巖

2. 12:45~13:15 研究発表 “Shelley’s Vaporous Poetics”
司会 黒瀬 悠佳子
発表者 橋本 良一

3. 13:30~15:30 シンポジウム キーツ神話の形成とその行方
司会 細川 美苗

パネリスト 岩本 浩樹

憂愁の想望—キーツ受容における〈不遇の天才〉神話の修辭的創造性

パネリスト 後藤 美映

“Like a pale flower by some sad maiden cherished” —

キーツの詩人像に見るか弱さと強靱さ

パネリスト兼コーディネーター 鈴木 喜和

偶像を視る眼—オスカー・ワイルドとジェーン・カンピオン

4. 15:45~16:45 特別講演 自我意識を曰くありげに肥大化させておいてから
萎ませる Byron の秘技

司会 池田 景子
講演者 笠原 順路

5. 16:50 年次総会 昨年度分会計報告・役員改選・その他

共催 科研究基盤 (C)「イギリス・ロマン派第二世代詩人の死と神話形成」(課題番号 22K00397)

研究発表

“Shelley’s Vaporious Poetics”

本発表は、シェリーの詩における雲の形象に焦点を当てる。シェリーの詩には鳥や風といった形象ほど顕著ではないものの、雲が繰り返し登場する。雲は鳥のように具体的で堅固な物質ではなく、他方で風のような無形の現象とも異なる存在である。また、雲は天と地、すなわち超越的なものと世俗的なものの中に位置する存在者である。さらに、雲は現実と理想、目に見えるものと目に見えないもの、変化と不変、動と静など、さまざまな二項対立のあいだに浮かぶ曖昧な存在でもある。本発表では、シェリーの詩がいかに関雲の曖昧な存在論的地位を表現しているかを考察する。そして、このような曖昧な存在者としての雲が、シェリーの詩学においてどのように象徴的な比喩を形成しているかを明らかにする。

(はしもと・りょういち 慶應義塾大学 講師)

キーツ神話の形成とその行方

発表者 岩本浩樹

憂愁の想望—キーツ受容における〈不遇の天才〉神話の修辭的創造性

発表者 後藤美映

“Like a pale flower by some sad maiden cherished” —

キーツの詩人像に見るか弱さと強靱さ

発表者兼コーディネーター 鈴木喜和

偶像を視る眼—オスカー・ワイルドとジェーン・カンピオン

ジョン・キーツといえば、古代ギリシアの楽土を甘美な詩的言語で描き出した神話の作り手である。しかし、キーツ自身の生を神話と見なすなら、それはいかにも大袈裟なことのように思われる。神話への昇華は極限まで純化された生の記録と常人には理解しがたい言説のなせる業であって、キーツに親しみやすさを覚える現代のわれわれには、おそらくそこに神話性を感じることはできない。それではこれが、〈生身〉のキーツを知らない当時の読者であったならどうであろうか。彼は停滞した詩壇の刷新を企て、『クォーターリー・レビュー』の刃に掛かって落命した若者であった。そしてその詩人はいま、古都ローマに眠りながらも、神話世界のアドニスのように自然と一体になって蘇り、栄ある永遠の生を享受しているのであった。愛読者はまだ数えるほど。しかしその耳には、「美は真なり、真は美なり」の警句がマントラのように響いていた。もちろん、嫉妬にまみれた、燃えるような恋については知る由もない。キーツの「死後の生」を面白くしているのは、まずはなんといっても彼の偶像化である。キーツに続いて世を去ったパーシー・ビッシュ・シェリーやジョージ・ゴードン・バイロンに比べても、偶像としての資質に劣るところはない。いやむしろ、より好都合な条件が揃っていたのかもしれない。史上初のキーツ伝はリチャード・モンクトン・ミルンズが手がけ、1848年にモクソン社から刊行された。これは一種のプロパガンダでもあったが、詩人が自らの言葉で語る体裁をとったこの二巻本の出版を境に、その神話性は消滅に向かっていくことになる。その過程にも注目すべきものがあって然るべきだろう。神話の形成と解体、それぞれの段階において取り沙汰される

作品は変わり、そしてその読み方にも違いが生じる。本シンポジアムの狙いはキーツ像の変遷を再検証し、神話と作品の相互作用の一端を解明することにある。

岩本は、詩人キーツの生前から死後数十年にかけての神話化が、彼個人の伝記的実状に即したものであるというより、特定の文脈におおきく依拠したものである可能性に着目する。すなわち、事実よりも、〈物語〉を優先して形成された詩人像であるという見方である。そもそも、神話化・物語化とは、つまるところ偶有的・個別的・断片的な生のいとなみを、どこか秩序的・総体的・普遍的な位相へと昇華および還元してみせる行為といえる。この前提のもと、今回とくに注目するのは、ロマン主義時代に人口に膾炙した「不遇の天才 (neglected genius)」という言説である。この修辭的発想は、およそトマス・チャタトンの早逝に端を発する。この〈雛型〉に則り、たとえば以降、ヘンリー・カーク・ワイトの夭折などが人びとの理解する文脈に落とし込まれた。キーツの死もほどなくこの物語に載せられ、水に流れたはずの彼の名は物語のなかを生きる。彼の初期の「死後の生」は、この物語の枠組みを通して滋養を得て、また互惠的に、先人の花陰をふたたび照らし出すこともあっただろう。先行研究においてキーツと当時の「不遇の天才」観との接点が論じられる際、おもに引き合いに出されてきたのはチャタトンであった。しかし今回の発表ではむしろ、近年再評価が進んでいるカーク・ワイトを積極的に取り上げたい。キーツの神話像の構築には、おそらくチャタトンと同等かそれ以上に、カーク・ワイトの受容が下敷きとして機能していただろうと推定されるからである。そしてその神話的な詩人像の形成に、キーツは客体としてのみならず、主体としても実際的に関わっていた様子が窺われる。キーツが世に問うた自己の詩的生命のありうべき軌跡と展望を、彼の詩や書簡、および彼の周辺作家の遺稿から実証的に読み取ってみたい。

後藤は、死後に偶像化されたキーツ像と、ときにそうした偶像とは異なるベクトルを持つ、キーツの詩作や書簡において読み解くことができるキーツ像とを比較する。その結果、「詩人とは何であるのか」とキーツ自身が見定めた詩人像の一片に触れてみたい。キーツ像については、死後に、早逝のか弱き詩人という、非実体的な偶像が創出された一方で、近年の批評において顕著なように、時代の政治的社会的潮流に深く根を下ろした、物質的、世俗的な詩人像が提示されている。こうした二極化した詩人像は、友人リチャード・ウッドハウスが蒐集した手紙や詩の写本からなる“Keatsiana”や、ミルنزによるキーツ伝に始まり 21 世紀に入っても出版され続ける伝記が示すように、キーツの美しくも悲劇的な人生と詩という宝庫から紡がれている。本発表では特に、シェリーの『アドネイアス』とミルنزの伝記を紐解きながら、早逝のか弱き詩人像について考察を行う。また生前に、キーツを“Junkets”と呼んだリィ・ハントラを中心

とした交流や、書簡、『エンディミオン』を中心に読み解くことによって浮き彫りになるキーツという詩人像を提示する。最終的には、シェリーが『アドネイアス』において、「一人のか弱い姿、人々の中の幽霊のような姿」(“one frail Form, / A phantom among men”)と自身を描写した詩句を手がかりに、ミルンズによって双星と称されたシェリーとキーツがともに、現実世界において物質的に“frail”であるもろもろの“Form”を、言葉によって形象化しようと苦闘する詩人であったことに論及する。そうした詩人の思索や苦闘によってこそ、キーツは死後の名声(“after-fame”(シドニー・コルヴィンの書名より))よりも、来世(afterlife)での復活を成しうることができるのではないだろうかということを考えてみたい。

19世紀のキーツ受容に多大な影響を与えたのはファニー・ブローン宛書簡の発見である。それは偶像視されていた人物のスキャンダルとなって脱神話化の流れを加速させる一方で、キーツ神話の秘教的な側面と持続性に瞠目させられる珍事ともなった。鈴木はこの一連の騒動と今日まで続くその余波に焦点を当てる。キーツ愛好家のハリー・バクストン・フォーマンは批判覚悟で1878年に39通の恋文を世に出した。ヴィクトリア時代の文人たちがそこに見たのは、未熟で品性に欠けた、変哲もない、恋する男の姿であった。それでも経済的な事情でブローンの遺族の手から離れた手紙が1885年に競売にかけられると、オスカー・ワイルドはソネットを書いて「芸術」を愛してなどいない、会場に群がる人々を非難する。学生時代のイタリア初訪問でプロテスタント墓地に立ち寄り、キーツを殉教した聖セバスチャンになぞらえ涙したワイルドにとって、命の手紙を商品にする行為は冒涇そのものであった。それから百年余を経たわれわれの時代にキーツの恋愛はドラマとなって再び甦った。ジェーン・カンピオン作『ブライト・スター』である。後世に残された愛の書簡集が〈往復〉でなかったことにこの映像作品の契機がある。不在であったはずのブローンはアート界におけるフェミニズム運動の伸張を背景に、裁縫で美を追求する自立した芸術家としてその姿を現す。この脚色によって生じるキーツ像と作品理解の変化を見極めたい。そしてワイルドに見られる偶像破壊への反動を引き合いに出し、盛衰するキーツ神話の枠組の中で『ブライト・スター』の再評価を試みる。

(いわもと・ひろき 茨城大学)

(ごとう・みえ 福岡教育大学)

(すずき・よしかず 日本女子大学)

特別講演

自我意識を曰くありげに肥大化させておいてから萎ませる Byron の秘技

前半は、まず Byronic heroes/heroines に言及し、Thomas Babington Macaulay の評論から、Byron 詩の登場人物に共通する特徴 egotism を抽出する。この特徴に関して Macaulay の本心ともいふべき Byron 観が述べられている箇所を紹介し、さらに我が国の Byron 訳者の言や、John Keats の言なども紹介し、*OED*で egotism/egotist の初出例を見て、その概念の近代性を考察する。後半は William Hazlitt の Byron 評（Walter Scott との比較を含む）と、意図的で曰くありげな肥大化する egotism の典型的な例を紹介し、その詩行に関して Byron 自身の見解、そして John Cam Hobhouse や Teresa Guiccioli らの見解を述べる。フィナーレとして、Byron には手厳しい Hazlitt が唯一絶賛している箇所を含む詩行を、egotism の縮小の観点から味読する。ここでは、自我意識を曰くありげに肥大化させた後、殊勝にも萎ませるのだが、その萎ませ方が実は Byron 流になっていて、そこに Byron 詩の悪魔的な特徴と魅力がある、と説く。エピローグとして、理解ある友人ら数名を特別ゲストとしてお迎えし、Hazlitt が絶賛した Byron の詩行に、スコットランドの作曲家 T. M. Mudie が 19 世紀につけた曲を、演奏・歌唱して頂くことで、日本シェリー研究センターが主催する Byron 没後 200 年を記念する特別講演の掉尾を飾りたい。

（かさはら・よりみち 明星大学名誉教授）